「国際・文化Ⅰ」の授業展開1

研究部　山本吉次

1．はじめに

本校は平成4年度から平成6年度まで3年間の計画で文部省研究開発校指定を受け、『新教科「国際・文化科」の導入を考慮した教育課程の検討』を開発主題として、実証的研究をすすめてきた。それは、学校教育法施行規則第57条の3の規定に基づく、教育課程の基準改定のために文部省の委嘱を受けて実践した研究であった。その研究開発課題と研究委嘱事項は、以下の通りである。(1)

研究開発課題三「高等学校の生徒の能力、適性、進路などに弾力的に対応する教育課程の研究開発」

研究委嘱事項2「高等学校において、自由研究や課題研究等の導入を考慮した教育課程の研究開発を行う」

この3年間の文部省指定研究で、いくつかの成果をあげることができた。しかし、まだ、多くの解決すべき問題点や課題が残されている。(2)　そこで、本校では、それらを解決し、総合的・学際的な教科としての完成度を高めるために、平成7年度からも、高等学校学習指導要領第1章第2款の4に基づき、「その他特に必要な教科」として「国際・文化科」を本校教育課程表に位置付け、「当該教科に関する科目」として「国際・文化Ⅰ」および「国際・文化Ⅱ」を継続実践することとなった。「国際・文化Ⅰ」は1年生で履修する2単位必修科目、「国際・文化Ⅱ」は2年生で履修する1単位必修科目である。

本稿は、3年間の指定研究の成果と反省点を踏まえた上で改編した「国際・文化Ⅰ」の内容と、平成7年度1学期における授業実践の報告である。なお、この実践は、本校教官荒木重治、風間重利、高橋栄一、宮本恵津子、分校淑子、そして私の6人の共同実践である。

2．文部省研究開発指定研究の成果と課題

(1)「国際・文化科」設置のねらいと「国際・文化Ⅰ」の目標・内容・方法

まず、「国際・文化科」設置のねらいと、本稿に関わる「国際・文化Ⅰ」の目標・内容・方法を示しておきたい。

「国際・文化科」設置のねらい

現代は地球上の様々な情勢や環境の変化が、直接我々の生活に影響を及ぼし、また我々個々の行為が、国際社会や地球環境に大きくかかわっていく時代である。我々は、今や国際社会や地球環境と切り離しては自己の生活が成り立たない時代に生きている。

このような時代の中では、国際社会や地球生態系における共存・共生者として、また、個性豊かな文化の創造者としての資質を育て、全人類的かつ地球的視点に立って、自己を認識し、多様な分野において積極的に自己の責任を果たしていく人間の育成がより一層望まれている。

そのためには、次のような態度や能力を生徒それぞれの個性に即して養う必要がある。

態度　①　自己の生活する地域の環境の特質を認識する態度

②　異質の文化や価値観を理解し、尊重する態度

③　自己と世界との関わりについて認識し、展望してゆく態度

④　自己の尊厳を自覚し、地球社会の一員であることを認識する態度

能力　①　情報を収集し、適切に処理する力

②　自己の意見を集約し、表現する力

③　自ら課題を発見し、それを解決・実践する力

このような認識に立ち、21世紀に生きる日本人の教育に関し、高等学校教育においても、これまで以上の配慮が必要である。

「国際・文化科」は、こうした世界認識に基づき、義務教育の成果を踏まえ、他教科の内容と緊密な関係を保ちながら、総合的な立場での教育効果をより高めようとして設置するものである。

国際・文化Ⅰの目標・内容・方法

(1)目標

自己の生きている地域やわが国の伝統、文化、生活に対する関心を深め、また、他の地域や国の異質な伝統、文化、生活を理解し、尊重する態度を育てる。さらに、地球的視点に立って、世界と自己、また自然と人との関わり方や在り方を認識する態度や能力を、討論や研究活動などを通して育てる。

(2)内容

①　科学と生活

科学の役割や、科学と時代・地域の関係を考察させるとともに、自己の存在や自己の生きる価値についての思索を深めさせる。

②　伝統・文化と生活

自己を育んできた地域の伝統や文化を他の地域との比較の中で理解させ、自らの生活との関わりについて思考を深めさせる。

ア）わが国の伝統、文化、生活などの特質について認識させるとともに、自己の生活に現われた思考性や文化性などを評価させる。

イ）わが国とは異なる伝統、文化、生活について認識させるとともに、互いに協調、尊重する方法を考えさせる。

③　環境と生活

自己の生活する地域の環境や生活を他の地域との比較の中で理解させ、自然と社会両面から自己の生活に対する認識を深めさせる。

ア）自己の生活に関わる様々な事物を通して、自己や自己の生活が国際社会や地域環境と密接に結びついていることを理解させる。

イ）現在、地球上に存在する様々な環境問題を取り上げ、それらの環境問題と我々の生活との関わりについて考察させる。

(3)方法

①　ディスカッション

②　グループ研究

③　体験学習

(4)　内容及び方法の取り扱い

①　内容全体に関して、義務教育の内容や他教科との関連に充分留意する。

② 文献上から学ばせるだけでなく、フィールドワークなどを通して調査・体験したり、また、校外の人々との交流を図りながら、広い視野から、伝統、文化、生活に関わる事柄を、意識化させるようにする。
③ 討論や研究活動などでは、生徒の主体的な学習がなされるよう配慮する。

(2)学習効果に関する成果と反省点

学習効果に関する成果と反省点については、3年間の在籍生徒に対するアンケート及び自由作文から次のようなことを列挙することができる。

［成果］

i）国際人としての態度・能力

国際人としての態度・能力として、「視野の広がり」「異文化理解」「自文化理解」「自己の主張と他者の尊重」「コミュニケーション・表現能力」「行動」の必要性を認識させることができた。

ii）総合的教科

当初、既設教科との連携あるいは既設教科へのフィードバックを踏まえた総合教科、いわゆるクロスカリキュラム的な教科を想定していた。だが、実際の研究開発のなかでは、その関連を明確にすることができず、生徒にも既設教科との関連を意識させることはできなかった。もちろん、本教科設置のねらいからいえばクロスカリキュラム的な授業実践は今後も模索していかなければならない。しかし、それとは違った意味で、生徒にとっては総合的教科であった。というのは、本教科が、各既設教科のように体系化された形で知識・技能を理解・習得するのでなく、自らで、あるいは生徒相互の議論のなかで、自己の従来から持つ知識、新たに調査して得た知識を総合して表現する教科であったからである。

iii）主体的学習

本教科は、教師による教え込みをできるだけ避けようと、ディスカッション、グループ研究、ディベート、論文作成という形で主体的学習を実践させてきた。当初は初めての授業形式に戸惑いを感じながらも、このような形式の授業を「楽しめた」「おもしろかった」という生徒は少なくなかった。そして何よりも成果であったのは生徒の相互教育力であった。生徒は、他者との関係を通して自己を認識し、さらに自己成長しようとしていた。

iv）表現・コミュニケーション能力

本教科を通して、単純な「話す」「書く」だけでなく、「課題に対して」「論理的に」「相手に説得できるように」表現する訓練を行なった。さらに映像表現・身体表現など、生徒はさまざまな表現力の工夫を試みた。それは確かに不十分かもしれない。しかし、明らかに日常会話を越えるものであった。そして、生徒は表現能力の重要性を自覚した。その意味で、本教科は、自己表現力・コミュニケーション能力の向上に大きく寄与したものといえる。

v）相互評価

本教科では、客観的評価を行なうことが後述するように非常に困難であった。そこで自己評価と相互評価という方式を導入した。その内、相互評価は、他者を評価することにより、自己を反省し、視野を広げ、生徒自身が今後に役立てようするという効果をもった。ここにも、生徒の相互教育力が効果を発揮していたといえる。

［反省点と課題］

ｉ）テーマの選び方と配列

「国際・文化Ｉ」においては、主体的学習の実践のためにどのようなテーマをどのような順序で配列するかが大きな問題点として残った。それは次の二つの点との関わりからである。一つは生徒の成長段階、つまり義務教育終了段階の知識や理解力、および興味関心との関係である。二つ目が、本教科・科目の本来のねらい・目標との関係である。前者を重視すれば後者が疎かになり、後者を重視すれば生徒との乖離が生まれる。この矛盾をどう止揚するのかが課題である。

ii）教師の指導

これに関しては二つの問題点があった。一つは生徒の主体的学習との関連である。当初、それを保障するために、教師の指導はできるだけ控えようという方針で臨んだ。それは確かに一定の成果を生み出したことは間違いない。しかし、日常知をグローバルな視点から解釈させるという本教科の目的を達成するためには、高校生の思考次元を一歩越えさせる必要がある。そのための教師の適切な指導とは何かを追求していく必要がある。

今一つの問題点は教師の専門性の問題である。言うまでもなく、現在の教師はすべて既設教科単位で採用されている。したがって、「国際・文化科」専門の教師はいないのである。本校においても、この研究開発をするにあたって、すべての教科からスタッフを充塡した。そのために、指導する教師の側に専門的知識がなく、それゆえに十分な指導が行えなかった。

iii）評価の問題点

本教科は、教科の性格上、非常に評価が困難である。その理由の一つが、創設して３年目の教科で、目標達成を何で計ればよいかという基準の不明確さである。言い換えれば、どのような技量が身につき、どのような知識・理解が身につけばよいかが今だに曖昧であるということである。今一つが、本教科で求める態度、資質や、水面下での努力など情意的領域をどのような形で客観的に評価するかということである。いずれも困難であるので、本教科では自己評価と相互評価を導入した。確かに前述のように相互評価には相互教育力という成果もあった。しかし、この方法はやはり主観的なものでしかない。自己評価や相互評価の意義をさらに追求しつつ、それとあわせて教師による客観的評価の基準と方法の策定が重要な課題である。

３．「国際・文化Ｉ」の再編

(1)「国際・文化科」継続実施の概要

前章で述べた成果と反省点・課題を踏まえて、平成７年度より「国際・文化科」は、現行学習指導要領第１章第２款の４による「その他特に必要な教科」として、本校教育課程のなかに位置付け、継続実施することとなった。その実践体制は以下の通りである。

ｉ）所管部　研究部

教務部ではなく、研究部所管としたのは、「国際・文化科」が完成した教科ではなく、今後本校の研究課題として、開発に取り組んでいく教科であるからである。

ii）教科名　「国際・文化科」

科目名　「国際・文化Ｉ」１年生時必修履修　２単位

「国際・文化II　２年生時必修履修　１単位

「国際・文化III」３年生時選択履修　１単位

なお、平成７年度は、「国際・文化Ｉ」および「国際・文化II」のみ実施

iii）担当教官

「国際・文化Ｉ」　担当教官６名

１Ａ：荒木重治（公民科）・宮本恵津子（英語科　１Ａ担任）

１Ｂ：山本吉次（地歴科）・風間重利（国語科）

１Ｃ：高橋栄一（地歴科）・分校淑子（家庭科）

「国際・文化II」　担当教官３名

２Ａ：越川靖彦（英語科　２Ａ担任）

２Ｂ：木村明人（地歴科　２Ｂ担任）

２Ｃ：深田和人（理科　２Ｃ担任）

iv）授業時間

「国際・文化Ｉ」　月曜日５・６限（午後２時限連続としたのはフィールドワーク学習などに便宜をはかるためである。）

「国際・文化II」　木曜日６限

⑵国際・文化Ｉの再編

本稿では、「国際･文化科」の２科目のうち、私がチーフとして担当した１年生時２単位履修の「国際・文化Ｉ」の再編について報告する。

前章でも述べたように、「国際･文化Ｉ」が継続実施していくための課題は、一つは生徒の主体的な学習と科目内容の乖離、今一つは、教師の指導の問題であった。これをどうすれば解決できるか、平成６年度末に発足した国際・文化科担当者会議で様々な角度から議論になった。その結果、出た方針が次のようなものである。

ｉ）科目理念を次のようなものとする。

「討論や事象研究、体験を通して、自己の存在と社会性を客観的に認識させるとともに、自己を取り巻く環境や文化を主体的に理解させ、異文化を理解し尊ぶ態度を養う。」

ii）綿密な年間計画を立て、各授業の目的を明確にする。

iii）従来別扱いをしていた海外（北京）現地学習を「国際・文化Ｉ」の中に取り込んで授業計画を立てる。

iv）オリエンテーションや授業の導入において、「国際・文化Ｉ」の学習全体や個々の授業の目的・方法を明確にし、生徒が主体的に学習しやすい環境を作る。

これらの方針について、若干の説明を補足したい。

過去３年間の実践研究で、科目内容①科学と生活②伝統・文化と生活③環境と生活にこだわり過ぎ、学習テーマが生徒の興味・関心やレディネスと離れ、主体的な学習をすすめる障害になっていた。そこで、ｉ)のように科目理念を定めることによって、内容も①～③としつつも、もう少し広くテーマを取りあげられるようにした。

ii）については、過去三年間の研究は、次週の授業でどのような内容を展開するかに追われていた。そのため、実際には年間計画の中での「本時の授業」の位置づけが不明確になり、それがゆえに授業目的も指導内容も不明確になっていた。そこで、本年度は従来の蓄積の上で、年度当初に綿密な年間計画を立て、各授業の目的も明確にして臨むことにした。

iii）については、平成４年度から実施してきた海外（北京）現地実習は、従来、文部省指定の研究開発である「国際･文化科」とは別扱いとしていた。しかし、本来、「国際･文化科」は、海外（北京）現地学習の実施と深く関連づけられて生まれた教科であった。つまり、海外（北

京）現地学習を実施するにあたり、訪問国の知識を与えるだけのお座成りの事前学習はではなく、「グローバルな視野を持った国際人」を育てる事前・事後学習として想定されたのが「国際・文化科」であった。したがって、本年度は、従来の蓄積を踏まえながら、原点にもどって、iii）を確認した。これによって、より科目の性格を明確にしようと考えたのである。

「国際・文化科」は、先学を学びながら本校独自に開発してきた教科である。本校に入学したての生徒にはもちろん初めて聞く教科名である。既設教科のようにその目的も内容も方法も生徒にはわからない。したがって、生徒は「授業の中で何に対してをどのように活動すればよいか、戸惑いを覚えざるをえない」という状況であった。これに対して過去３年間克服の努力をしてこなかったことはないが、どうしても教科・科目の開発と並行して授業を実施することになり、本教科の目的・内容・方法を生徒に徹底することができなかった。そこで本年度は、iv）の方針を明確にしたのである。

過去３年間の「国際・文化科」は、開発と授業実施が並行して行われたがゆえに、教師にとっても、生徒にとっても不明瞭な教科であった。それが本教科のさまざまな問題点の根源にあった。ｉ）～iv）の方針を明確にすることにより、それらの問題点・課題を解決しようとした試みが、本年度の「国際・文化Ｉ」である。

⑶「国際・文化Ｉ」の年間計画

平成７年度「国際・文化Ｉ」年間授業計画案は次頁の通りである。この内、一学期分は授業実施内容である。

年間計画は、大きく三つに分かれる。

第１期（４月～６月中旬）は、「自己表現を身に付けさせるとともに、自己及び自己を取り巻く環境を認識し、さまざまな体験を通して視野を広げようとする態度を身に付けさせる」期間と位置付けている。生徒にとっては「自らを知り、他者を知る」期間である。主に授業方法はグループディスカッションやフィールドワーク形式を取る。

第２期（６月下旬～10月）は、「自ら課題を発見し、調査能力、分析考察能力、表現力を身につけさせるとともに、自文化や、自文化と他文化の関係を認識し、それぞれの文化を尊重する態度を身に付けさせる」期間と位置付けている。生徒にとっては、「自文化を知り、自文化と他文化の関係を探る」期間である。授業方法は、グループ研究発表形式である。６月下旬からこの期間に入るのは、夏休みを調査期間として生徒が有効に利用できるようにするためである。

第３期（11月～３月）は、「課題を持った体験学習により、異言語圏とのコミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、異文化及び、異文化と自文化の関係、外から見た自文化を認識し、国際協調の態度を身に付けさせる。」期間と位置付けている。生徒にとっては、「異文化を体験し、海外から自文化を見る」期間である。具体的には、異文化体験学習として３月下旬の海外（北京）現地学習を位置付け、その学習が効果あるものとなるように、歴史・風土・文化・現代社会・会話を学ばせるとともに、生徒に海外現地学習に向けての課題をもたせるというものである。

なお、一昨年度および昨年度は、ディベート形式の授業を「国際・文化Ｉ」の中に組み込んでいたが、これは本年度取り止めることとなった。ディベート形式で授業を進めていくためには、生徒の資料収集力、総合力、表現力など相当高い能力が要求される。そのようなディベート形式による授業は、海外現地学習による異文化体験をはじめ、生徒会活動・部活動などさまざまな体験を経たのちのほうが有効ではないか、と考えたからである。

平成７年度国際・文化Ｉ年間実施概要および計画案

月　日	学　習　内　容	諸行事
Ｉ自己表現力を身につけるとともに、自己および自己を取り巻く環境を認識し、様々な体験を通して視野を広げようとする態度を身につける（ディスカッション、フィールドワーク）		
４月15日	第一回オリエンテーション　「年間計画について」	・入学式
17日	第二回オリエンテーション　「ディスカッションについて」	・オリエンテーション合宿
	ディスカッション①「犯人は誰だ。君も私も名探偵」ＰＡＲＴ１	
24日	ディスカッション②「犯人は誰だ。君も私も名探偵」ＰＡＲＴ２	
５月１日	Ａ組　　コンピュータ講習会	
	Ｂ・Ｃ組　ディスカッション③　「『今春の選抜高校野球は開催すべきでなかった』という意見についてどう考えるか」	
８日	Ａ組　　デイスカッション③　「『今春の選抜高校野球は開催すべきでなかった』という意見についてどう考えるか」	
	Ｂ組　　コンピュータ講習会	
	Ｃ組　　ディスカッション④　「『この際、学校完全５日制にすべきだ』という意見についてどう考えるか」	
15日	Ａ・Ｂ組　ディスカッション④　「『この際、学校完全５日制にすべきだ』という意見についてどう考えるか」	
	Ｃ組　　コンピュータ講習会	
29日	ディスカッション⑤　「我々の生活文化」（留学生招聘準備）	・中間試験
６月５日	留学生との交流授業　「我々の生活文化と留学生の生活文化」	
12日	フィールドワーク準備・野田山歴史散策	・高校総体
19日	フィールドワーク　福祉関係（ひまわり教室）　ハイテク関係（ＮＴＴ） 環境関係（西部クリーンセンター）　報道（ＭＲＯ） 安全保障（自衛隊）　伝統工芸（友禅伝統産業会館）	・運動会
Ⅱ自ら課題を発見し、調査能力・分析考察能力・表現能力を身につけると共に、自文化や、自文化と他文化の関係を認識し、それぞれの文化を尊重する態度を身につける（グループ研究）		
26日	第二回オリエンテーション　グループ研究に向けて	・期末試験
７月３日	テーマ・仮説・方法論の決定	・スポーツ大会
17日	助言教官の第一回助言　仮説と調査方法について	・夏休み
９月４日	助言教官の第二回助言　考察と発表方法について	・第一回学力試験
18日	グループ研究発表①	・開校記念祭
25日	グループ研究発表②	
10月２日	グループ研究発表③	
９日	グループ研究発表④	
23日	クラス代表発表会（「レジュメ集」作成）	・中間試験
Ⅲ課題を持った体験学習により、異言語圏とのコミュニケーション能力を身に付けると共に異文化および異文化と自文化の関係、外から見た自文化を認識し、国際協調の態度を身につける（体験学習へ向けて）		
30日	中国学①┌歴史と風土	・スポーツ大会
11月６日	│古代・中世東アジア世界	
13日	└古典における日本と中国	
20日	中国学②┌近代日中関係	
27日	│日中人間交流	・期末試験
12月４日	└近代中国	・冬休み
１月22日	中国学③┌中国人の生活	・外部模試
29日	│中国語会話（留学生を招いて）	
２月５日	└現代中国	
19日	中国を百倍楽しむ①　中国の見所 グループ課題「中国で何を体験するか」	・如月祭
26日	中国を百倍楽しむ②　「しおり」作成	・期末試験
３月中旬	所感「国際・文化科を学んで」提出	・卒業式
下旬	北京現地学習	

4.「国際・文化Ⅰ」平成7年度1学期の実践

前章で述べたように再編された「国際・文化Ⅰ」の平成7年度1学期間の実践内容について報告したい。この時期は、年間計画の第一期にあたり、6月下旬から第二期に入る。第一期の学習活動としては、(1)オリエンテーション受講、(2)グループディスカッションによる学習、(3)留学生との交流授業、(4)フィールドワークによる学習活動、を展開した。第二期にあたる活動は、グループ研究に向けてのオリエンテーションや助言教官からの助言である。第二期の学習活動は現在進行中であるので、その内容と成果については次号紀要で報告したい。

(1)第1回オリエンテーション

本年度の方針に基づき、第一回の全体オリエンテーションを特に重視した。ここにおいて、従来不明瞭であった「国際・文化科」の目的を、国際化に対応した教育であることを明確にしようと考えた。そのため具体的に行ったオリエンテーションの内容は、現在生徒自身が持っている「国際人像」を意識化させて、そのうえで、これからの国際化の時代に対応する人間像、いわゆる「グローバルシティズンシップ」(3)を明示し、「国際・文化科」とはそれを育てる教科であるということを明らかにしようとするものであった。

次に示すものは、このオリエンテーションに先立って1年生全員に書かせた作文「国際人とは」からキーワードを抜き出して集計したものである。高校入学当初の1年生の国際感覚を知るひとつの資料ともいえるので、少数意見もすべて掲載した。作文総数は生徒数の125であるが、作文からのキーワード抜き出しであるので、1人の複数の意見が集計されている。

金沢大学教育学部附属高等学校49回生が考えた「国際人」　平成7年4月15日

(1)　外国との関係についての記載

①外国を飛び回って活躍する人（仕事・スポーツ・文化・研究・政治・スチュワーデス）25

②外国を飛び回って活躍するだけでは国際人ではない　21

③よく外国に旅行するだけでは国際人ではない人　6

④外国とつながりを持っている人・外国人の友達を持っている人　3

(2)　コミュニケーションについての記載

①外国語が堪能な人　38

②外国語が堪能なだけでは国際人ではない　25

③コミュニケーション能力のある人・自己表現力のある人　13

④自分の意見をはっきり言える人　6

⑤他者の意見の聴ける人　2

(3)　行動についての記載

①世界に向かって行動できる・地球規模の行動ができる人・世界に貢献できる人　22

②世界平和の実現に努める人　7

③外国人と共に行動できる人・交流できる人　5

④国と国とをつなぐ人・国と国との関係を解決する人　10

⑤どこの国の人とも同じ人間として付き合える人・対等に付き合える人　13

⑥クリントン大統領や村山首相ではなく（黒柳徹子のように）発展途上国のために働く人

⑦クリントン大統領や村山首相・天皇家の人々　3
⑧国連総長のような人・国際連合で働いている人　3
⑨他国の立場を考えながら行動できる人　6
⑩自国の利益をこえて活動できる人　5
⑪変化に対応できる人　1
⑫積極的に物事に取り組むことができる人　1
⑬常識のある人・マナーの守れる人　3

(4)　考え方についての記載
①広い視野で物事を考える人　17
②地球規模で物事を考える人　17
③客観的に（偏見を持たず・先入観なく）物事を考えられる人　5
④国家や民族の境界を超えて考え、行動できる人・国境を持たない人　10
⑤世界に目を向けている・関心を持っている人　15
⑥世界情勢を理解している人　6
⑦異文化を理解し・尊重しようとする人　54
⑧外国人と心を通いあえる人・気持ちの理解できる優しい人・互いに認めあえる人　21
⑨文化の違いに対応できる人・異文化の中で生きていける人　9
⑩自文化を理解する人・誇りを持っている人　18
⑪自文化を発信・紹介できる人　9
⑫一人一人の意見を理解しあえる人　1

(5)　その他についての記載
①自分の意見を持っている人　9
②新しいものを作る創造的な人　1
③自らの成長のために努力できる人・夢に向かって生きる人　3
④歴史に名の残る人　1
⑤国際人という言葉は将来なくなるであろう。　1
⑥積極的に自分の世界を広げていく人・自分の世界が広い人　2
⑦「国際人」とは日本人が持っているイメージであり、存在しない。　1
⑧世界に羽撃いている人・羽撃こうとしている人　1

オリエンテーションでは、この記載集計をもとに、おもに二つのことを話して導入とした。ひとつは、(1)－①と(1)－②、(2)－①と(2)－②、(3)－⑥と(3)－⑦のように対立している記載があることである。確かに、高校へ入学したばかりの１年生には、「国際人とは」と記載させれば、「外国を飛び回って活躍する人」で「語学が堪能な人」「国際舞台で仕事をする人」と答えるのが素直な所であろう。しかし、私が大切にしたいのは、「外国を飛び回って活躍する」「語学が堪能である」「国際舞台で仕事する」だけが「国際人」ではない、という記載が少なからずあったことである。オリエンテーションでは、後者の立場こそを明確にし、そのためにはどんな考え方を持ち、どのような行動をするべきかを考えようとするのが「国際・文化科」であることを訴えた。

今一つは、この記載のなかに、「国際・文化科」で育てようとしている概念がほとんど入っていることである。たとえば、「コミュニケーション能力」「行動」「平和」「広い（地球規模の）視野」「脱主権国家」「異文化理解と尊重」「自文化理解」「心の交流」などである。だが、生徒の意見を集約すればこのようにまとめられるわけで、一人の生徒がこのような概念すべてを持っているわけではない。また、さらに重要なのは、実際の具体的な事例に対する考えや行動がどれだけ備わっているかわからないことである。オリエンテーションでは、生徒それぞれが「国際・文化科」で期待する何らかの「国際人としての資質」を持っていることを明らかにした上で、その資質をさらに広め深め、またどのような態度や行動をとるべきかを自ら考えていく教科が「国際・文化科」であることを明らかにした。

この導入を踏まえて、「国際・文化科」を通して身につけてもらいたい「国際人としての資質」を５点示した。(4)

①国家間（international）の発想ではなく、地球規模（global）の発想を持ち、自然環境と共生できる態度をもっていること。　（共生）

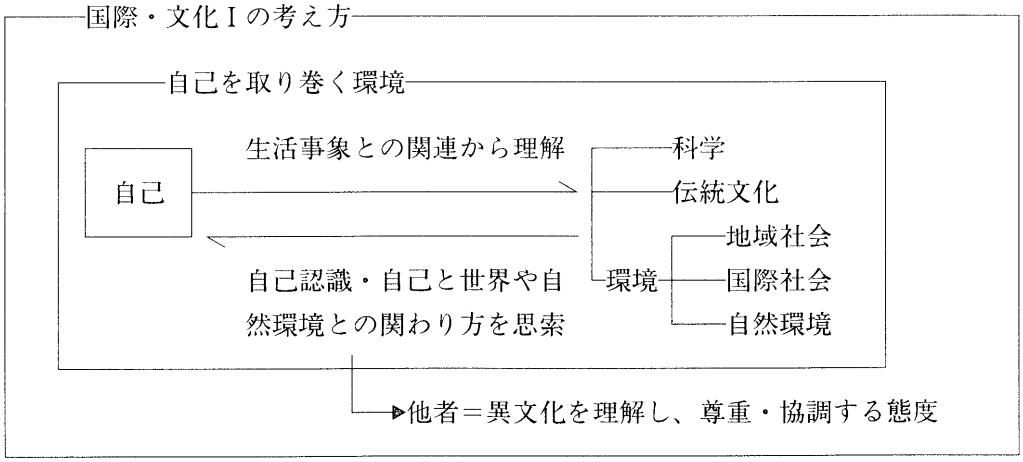
②自文化と異文化を理解し、その違いを認めた上で異文化の人と共存していく態度を持つこと。　（共存）

③外国語の習得や外国に関する断片的な知識の理解ではなくて、既習の技能・知識を総合する能力を持っていること。　（総合力）

④知識・理解だけではなく、地球社会のなかで、変化に対応して自発的に行動できる能力を持っていること。　（行動力）

⑤自己の考えを、どのような人にも正確に伝達できる表現能力を持っていること。（表現力）

つづいて、下の図によって「国際・文化Ｉ」の考え方を説明した。



この図について、若干の説明を加えておきたい。本科目では、自己を取り巻く環境として、「科学」、「伝統文化」、「地域社会」、「国際社会」、「自然環境」を想定している。本科目の第一段階は、それら環境を具体的な「生活事象との関連」から理解することである。第二段階は、その理解をフィードバックして「自己認識」を深めさせ、「自己と世界や自然環境との関わりを思索」することである。そのうえで、「他者＝異文化を理解し、尊重・協調する態度」身につけることが第三段階である。本図は、学ぶべき対象と学習活動や身につけるべき態度を明示したものである。

最後に、前出の年間計画表をもとに具体的な学習活動を順次説明した。これについては、前章の(3)と重複するので割愛する。

以上、オリエンテーションでは、特に「国際・文化Ｉ」で求める資質や、「国際・文化Ｉ」の

考え方に力点をおいた。「国際・文化Ⅰ」という科目の学習活動はきわめて拡散的である。そうであるがゆえに、過去三年間の生徒の感想に、「何が目的であるのかよくわからない」「この科目のどこが『国際』であるのかわからない」という批判が少なからずあった。その批判に答えるため、最初のオリエンテーションで、本科目が「国際人」としての資質＝グローバルシティズンシップを身につけるものであることを強く訴えたのである。

いまひとつ、年間計画表を通しての具体的な学習活動の説明にも多くの時間をさいた。これも拡散的な科目であるがゆえに、生徒の混乱を避けるため、具体的な学習活動として何をどのようにするかを明確にしておく必要があったからである。

(2)グループディスカッション

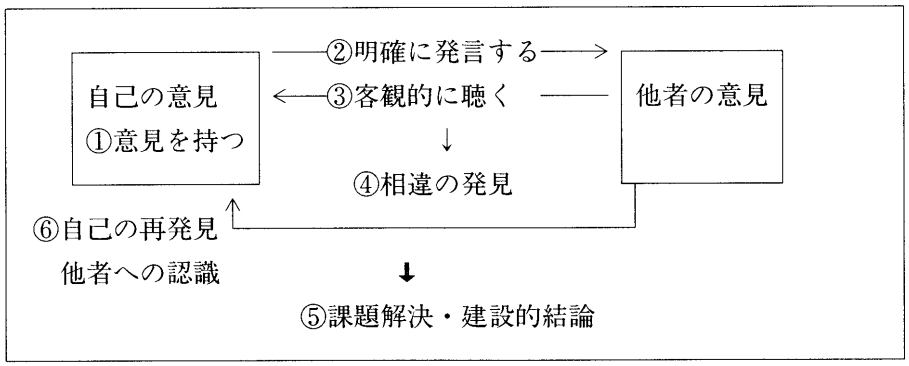
①グループディスカッションについてのオリエンテーション

まず、グループデイスカッションの実施に先立って行なったオリエンテーションで使用したプリントを見ていただきたい。

グループ・ディスカッションに向けて　国際・文化Ⅰオリエンテーション②1995.4.17

(1)目標

①課題に対して自分の意見を持つ。
②少人数の中で、自分の意見を明確に発言できるようにする。
③討論の中で、他者の意見を客観的に聴く。
④討論を通じて、自他の意見の相違を発見する。
⑤討論しながら、課題を解決したり、総合的・建設的な結論を導きだす。
⑥討論の中で、自己を再発見し、他者を知る。



(2)方法

①課題について、資料その他で認識する。
②課題について、各人が意見を述べる。
③各人の意見を集約し、班の意見をまとめる。
④クラス全体の前で中間発表し、他班の批判・意見を受ける。
⑤他班の批判・意見を受けて、各班で課題の解決策や建設的結論を検討する。
⑥クラス全体に対して、各班の解決策・結論を発表する。
⑦クラス発表の中で、他班の解決策・結論を批評する。
⑧討論全体について、自班の解決策・結論および他班に対する批判をレポートに記述する。

(3)グループ編成

7名で1グループ　各クラス6グループ

グループは、ディスカッションごとに再編

(4)役割分担

司会　討論全体を運営する。

各人に意見を述べさせる。

討論を整理する。　意見を集約する。　論点を明確化する。

☆司会の力量が討論の質を決める

記録・発表者　各人の意見、討論の集約を記録し、クラス内で発表する。

(5)ディスカッションを行う上での注意事項

①ディスカッションにおいてはまず積極的に「発言する事」が大切。単なる聞き役では成果は半分以下。発言することこそ成長の第一歩。

②発言することができたら、次は上手に聴くこと。他者の意見を最後まで聴くこと。途中で口を挟まない。意見を聴くときには先入観を捨てること。聞き上手は話上手。

③他者の意見を聴いたら必ず、それに対して自己の意見を持つ。その意見は、賛成、反対、条件付賛成のいずれであっても良い。他者の意見を聴いたらそれを批評することが礼儀。

④相互の意見を戦い合わせるとき、感情論にならないこと。事実・根拠に基づいた論理的な議論をすること。因果関係を大切にし、論理に矛盾をなくすこと。感情だけの議論はワイドショー。

⑤ディスカッションは、グループで意見をまとめることが目的。他者から批判されることによって、自己の間違いや矛盾を素直に認めること。

(1)目標、(2)方法については、このプリントを見ていただければお分かりいただけるであろう。(3)以下は、過去3年間の成果と反省を踏まえてまとめたものである。(3)のグループ編成については、できるだけ多くの人間の意見が聴け、しかも全員が参加できる最適の人数は6～7人である。次に(4)の役割分担については、とくに司会の力量が討論運営の成否に重要な意味を持つ。また、司会には他者の意見を聴き、それぞれの意見を整理集約し、論点を明確にしながら討論を進行していく能力が要請される。これを経験することは、本科目で期待している能力の育成に大きく役立つものである。(5)はディスカッションをしていく上での基本的な注意事項である。①積極的に発言すること②聴き上手になること③他者の意見に対する自己の意見を持つこと。④論理的な議論をすること⑤自己の間違いや矛盾を素直に認めること、である。中学校時代までにも生徒たちはディスカッションを経験してきたであろうが、そこにおいての注意事項をまとまった形で意識化することは、ディスカッションによる学習を効果的にするために重要であろう。

次に、実際に行ったディスカッション方式の授業展開を示す。

②授業の概要

第１回ディスカッション　平成７年４月17日（月）５・６限　４月24日（月）５限

テーマ　「犯人は誰だ、君も私も名探偵」－暴風雨の宿－

（出典『私だけが知っている』台本集）

推理小説の「条件」部分のみを読み、グループ討論で「犯人」「犯行方法」「動機」をまとめる。

目的）ｉ）自己の意見を持つ　ii）他者の意見を聞く　iii）討論により意見をまとめる

授業展開）

４月17日	グループディスカッション・オリエンテーション		50分
	資料講読		30分
	登場人物のキャラクター 登場人物の人間関係 登場人物の犯行状況の推定 今日のディスカッションでどこまでわかったか	グループ討論	20分
４月24日	ズバリ犯人は 犯行方法は（凶器、犯行現場の説明も含めて） 動機は	グループ討論	20分
	いっせいに黒板板書の形で発表		10分
	グループ間討論（他グループ批判）		15分
	解答解説講読		５分

なお、「国際・文化Ｉ」は２時間連続の授業であるが、４月24日は学校行事の都合で１時間しか授業できなかった。

生徒の活動状況）　（なお、生徒の活動状況は私が担当した１年Ｂ組についてのものである）

「登場人物のキャラクター」「登場人物の人間関係」「登場人物の犯行状況の推定」という階梯を踏まえて犯人・犯行方法・動機をグループ討論によって明らかにしようとする授業であったが、各階梯についてかなり論理的な思考の展開がみられた。また、生徒の興味ある題材であったことが功を奏し、グループ内においても活発な討論が行なわれ、発表後のグループ間討論においても積極的な意見交換が行なわれた。

第２回ディスカッション実施内容　　平成７年５月１日

テーマ）「今春の選抜高校野球は開催すべきではなかった」という意見について

目的）ｉ）第１回と同様の目的

ii）社会事象について課題を発見する

iii）社会事象について広い視野から考える

授業展開）

新聞資料講読	「阪神大震災で揺れる春の選抜　開催か中止か」（東京読売新聞） 「『深層表層』阪神大震災からちょうど１カ月で開催が決まった選抜高校野球決断の足跡	30分

	浮上した縮小案、折衷案」(共同通信) 「『復興の球春　甲子園』甲子園からバスが消えた　鉄道各社も震災対策」(共同通信) 「『復興の球春　甲子園』もっと楽しめば…自粛甲子園に外国人の目」(共同通信) 「大阪国際女子マラソンが中止　地震被災地への影響を配慮」(共同通信)	
ディスカッションⅠ	各自意見表明 　開催すべきでなかった 　今春のように開催すべきであった 　従来通りの形で開催すべきであった 　別の方法・条件で開催すべきであった。	20分
休憩		10分
ディスカッションⅡ	グループ内討論 グループ内意見のまとめ	15分
クラス討論	板書による各グループ意見の発表 他グループ批判および反論	15分
レポート作成	「『今春の高校野球は開催すべきではなかった』という意見について」自己の意見をまとめる(400字)	20分

生徒の活動状況と反省点)

i) ディスカッションⅠ・Ⅱは、生徒にとってタイムリーな話題でもあり、また、比較的興味がある話題で、活発な討論が展開されていた。

ii) グループ内意見は、多くのグループが、「今春とは違った条件・方法で開催すべきであった」であった。つまり、被災地の救援に邪魔にならないようにしながら、また、被災者の感情を損ねないようにしながら、ブラスバンド等による応援を許し、今春実施以上に盛り上げるべきであったという意見であった。また、「今春のように開催すべきである」という意見も、理由は前者と同じで、「開催すべきではなかった」という意見はなかった。したがって、グループ討論では、大会を応援で盛り上げることが被災者にとって「勇気付けになるのか」それとも「迷惑・感情を害するものになるのか」が争点となった。争点が一つだけであったこと、それに加えて、グループ内では発言できるがクラスの前では発言できないという生徒の状況があり、クラス討論は一定展開したが、特定の者のみの発言に終わってしまった。

iii) 確かに、討論はヒューマニズムに立脚して展開されていた。しかし、教師側としては、さらに視野を広め、高校野球自体の在り方(例えば、商業主義、ヒロイズムの拡大宣伝

など）や、高校野球のみにとどまらず、高校生のスポーツの在り方にまで討論が発展することを期待していた。そのため、討論の始めには「社会事象について広い視野から考える」という目的から、この点についても示唆をしておいた。しかし、高校１年生段階ではそこまで考えが及ばなかった。じつは、このような発想を持つような資料(「お涙頂戴の甲子園に意義あり！」『月刊Ｖｉｅｗｓ』1995年５月号）も用意していた。しかし、事前の担当教師会議で、生徒を誘導するような資料を与えることはやめよう、できるだけ客観的な資料のみを与えようということに決した。教師が指針を与えるのか、それとも、生徒自身の経験と客観的資料のみで考えさせるのか、この点は、本教科の在り方を規定するものであり、なお部内で検討されるべき問題である。

第３回ディスカッション実施内容　　平成７年５月８日

テーマ)「この際、学校完全５日制にすべきだ」という意見についてどう考えるべきか

目的）ｉ）前々回（自己の意見を持つ　他者の意見を聴く　討論により意見をまとめる）・前回（社会事象について課題発見　社会事象について広い視野から考える）の目的

ii）表を分析する力を持つ

iii）社会事象についての解決策を考える

授業展開）

資料講読	「学校週５日制の在り方について」(学校週５日制推進委員会・石川県教育委員会)	30分
ディスカッションⅠ	・表から分かったことは何か。 生徒の意識　保護者の意識　教師の意識 協力校と一般校の違い ・高校生にとって「学校５日制の利点と問題点」を、自己の経験から、色々な立場から、社会全体の状況との関係から考える。	20分
休憩		10分
ディスカッションⅡ	グループ内で学校５日制の是非を決める。 是論の場合は、週５日制をどうすれば教育上効果的になるかを考える。 非論の場合は、どのような問題点が改善不可能なことかを考える。	20分
クラス討論	各グループの意見発表 是論ｖｓ非論でクラス討論	30分

生徒の状況と反省点）

ｉ）生徒の意見

是論

・体を休めることができる。

・土曜日遊べる。
・月２回の土曜休日の方がだらける。
・旅行など日頃できないことができる。
・自分で勉強できる時間ができる。(予復習などの遅れを取り戻せる。)
・自由時間を作ることで自主性が生まれる。
・教育にゆとりを持たせるためによい手段である。

５日制の効果をあげるためにはどうしたらよいか

・地域での活動を盛んにする。施設を増やす。
・学校などで、映画会・演奏会を催す。
・授業内容を減らす・学習指導要領を変える。
・生徒の意識変革を導く。
・土曜日を休日とするよりも、水曜日か木曜日を休日としたほうがよい。

非論または改善不可能な点

・学校が楽しいので休みたくない。
・地域活動は、小学生には楽しいかもしれないが、高校生にはばからしい。
・外国にあわせただけの政策としての止むを得なさを感じる。
・学校行事を削られるのは困る。
・休んでもすることがない。行く場所がない。
・友人に会えない。
・家庭で邪魔といわれる。
・授業がなくなり、宿題が増える。
・一回の授業がハードになる。65分授業、７限目授業は困る。むしろ土曜日に授業があったほうが授業に集中できる。
・休日を無駄に過ごしてしまう。
・教育委員会の目的と生徒の使い方が異なる。
・学校５日制になっても、画一的教育から個性を生かす教育にならない。
・ゆとりを持たせるのなら、休日ではなく、授業自体に持たせるべきである。

ii）生徒の意見をあらためてみると、生徒自身の体験からくる新鮮な、そして本音の思いが伝わる。しかし、身近な問題であるがゆえに、感情論に傾斜してしまったといえる。また、教師側からの指示「色々な立場」「社会全体状況との関係」から考えることができなかったようである。「教師の立場」「親の立場」「労働環境との関係」について考えさせるように仕組むことが、視野を広げさせるためには必要であったのではないか。例えば配布資料のほか、各家庭で親にアンケート調査をさせて、それも踏まえて討論させてもよかったかもしれない。学校５日制反対論の資料も参考にさせるべきでもあった。

iii）第３回目ディスカッションの課題：「解決策を考える」についても、「授業内容を減らす」（これも大切な解決策であると考えるが）など自己の経験と感覚からの意見が多かった。また、「生徒の意識改革をはかる」という意見もあったが、どのように変えるかは明確でなかった。このような点を深めさせることが今回の授業のポイントであろう。今となって、そのような指導ができなかったことは教師側の責任であると、反省している。

iv）たしかに、学校五日制の本質や「新しい学力観」の意味が分かっていない生徒にこれ以上の議論を求めることは無理かもしれない。しかし日常の状況を意識化させ、問題を深めさせるという意味においては、一定の成果があったといえよう。

③ディスカッション授業を通しての反省点と課題

ｉ）テーマについて

ディスカッションに関して、どのようなテーマを選ぶかは、過年度来の問題であった。そこで本年度は、次の二点を、テーマ選択の基準とした。

ア）生徒が興味・関心を持ち、討論に積極的に参加できるテーマであること。

イ）生徒の視野を拡大し、問題発見・情報分析・問題解決という能力を開発できるテーマであること。

これらを踏まえて、第１回は「犯人は誰だ、君も私も名探偵－暴風雨の宿－」、第２回は「『今春の選抜高校野球は開催すべきではなかった』という意見についてどう考えるか」、第３回は「『この際、学校完全５日制にすべきだ』という意見についてどう考えるべきか」というテーマを設定した。第１回は、国際・文化Ｉの最初の授業であり、特にア）の観点を重視したものである。これに続いて、第２回・３回は、ア）にイ）の観点を加えるよう考慮したテーマ設定であった。結果として、テーマに対する生徒の親しみやすさから、生徒の思考力を働かさせながら、討論も比較的活発にすることができた。

ii）目的の段階的設定について

３回のディスカッションを通して、技術上の目的を次のように高めていった。

ア）第１回　自己の意見を持つ。他者の意見を聞く。討論により意見をまとめる。

イ）第２回　社会事象について課題を発見し、広い視野から考える。

ウ）第３回　表を分析する力を持つ。社会事象についての解決策を考える。

自己の意見の言いっぱなしというディスカッションを越えるため、グループの意見をまとめるという作業を特に意識的にさせた。また、イ）ウ）の目標達成に適したテーマとして、第２・３回を設定した。しかし、実際のディスカッション授業は必ずしも机上の論理の通りにはならなかった。ディスカッションは生徒自身の体験や感覚からの議論になり、課題とする「広い視野」や「解決策を考える」までにはいたらなかった、というところが実情である。高校１年生段階では、それも止むを得ないと考えつつも、「生徒の視野を広げる」ためにどれだけ、教師が教師自身の視点・意見を出すべきか、あるいはどれだけの作為を仕組むかが、今後の課題である。

iii）配布資料について

過年度までの反省として、生徒が討論するための知識・情報があまりにも少ない、ということがあった。本年度はそれを踏まえて、客観的な資料を与え、それを読んだ上での討論という形をとった。そのために、事実という根拠をもった議論ができたことは確かである。しかし、生徒の議論は資料に大きく影響される。「視野を広げ、多面的な考察」をさせるためには、配布する資料にいっそうの工夫が必要であろう。賛成論・反対論という両面の資料を与えたり、立場の違う人の意見を提示したり、たとえば、家族に対する聞き取りなど、事前の調査をすることも一案であろう。

iv）全体として

個人差はありながらも多くの生徒が積極的に楽しく参加していた授業であった。他の教科と学習方法がまったく異なることが、戸惑いを生み出すのではなく、むしろ新鮮な感覚で生徒に受けとめられたようである。討論の質には課題はあるが、具体的事例に対する思考の深化、意見の集約など、学習効果は少なくなかった。また、「国際・文化Ｉ」の最初の授業として、生徒の勉強観・教科観の変化には十分な効果があったといえよう。

⑶留学生との交流授業

①授業の概要

まず、５月29日に実施した留学生交流準備授業と、その１週間後、６月５日に実施した留学生交流授業の概要を示したい。

①目的：留学生に日本の生活文化を伝え、留学生から母国の生活文化について聞くことにより、視野を広げ、自己を取り巻く環境について再認識するとともに、内外の文化の異質性と同質性を認識し、異文化との交流の在り方を体験する。

②来校留学生（金沢大学）

A組	ザイ　エンディ　翟恩地　（中国）	男32才　自然科学研究科地震工学
	アクインティー　トリーシア　アン AQUINTEY TRISHA ANN　（アメリカ）	女21才　教育学部　国語学
B組	レバニドフ　キリル　ミハロビッチ LAVANIDOV KIRILL MIKHAILOVICH (露)	男23才　経済研究科　経済学
	クツ　キョウコウ　屈京紅（中国）	女28才　教育学部　国語学
C組	テムラック　チャオ TEMRAK CHAO　（タイ）	男31才　経済学研究科　経済学
	カ　ヘイ　何　萍　（中国）	女26才　理学研究科　数学（確率）

３．交流準備授業：交流授業における「日本の生活文化」発表内容の検討　　５月29日

⑴発表事項検討グループの編成　６名×７班

⑵交流授業におけるグループ発表内容の検討

次の「日本の生活文化」に関する七項目について、自分たちはどう考えているかを留学生に発表できるように、グループごとに話し合い、ベストスリーを決める。

①学校生活紹介　「附属高校こんな学校ベストスリー」

②地域紹介　「金沢ここが好き、ここが嫌いベストスリー」

③結婚　「結婚相手に求めるものベストスリー」

④食生活　「私たちにとって好きな食物ベストスリー」

⑤遊び　「休日はこのように過ごしたいベストスリー」

⑥年中行事　「私たちにとって大切な年中行事ベストスリー」

⑦対外観　「留学生の母国とはどんな国」

☆かならず、理由づけをすること　５分程度で報告できること

⑶交流授業における質問事項の検討

「ぜひ、こんなことだけは聴いておきたいベストワン」

留学生交流授業　6月5日

留学生自己紹介	・現在、金沢大学で学んでいる内容。 ・留学先として日本を選んだ理由。 ・金沢大学を選んだ理由。	10分
交流授業 「我々の生活文化と留学生の母国の生活文化」	①～⑦の各項目それぞれについて、本校生徒各グループが一項目ずつ担当して、前回の授業で検討した「ベストスリー」を、根拠を踏まえて報告。→それぞれの項目について順次、留学生が、留学生の母国について応答する。 項目 ①学校生活紹介　②地域紹介　③結婚　④食生活 ⑤遊び　⑥年中行事　⑦対外観	70分 （途中休憩10分）
留学生との質疑応答		10分
所感作成	「我々の生活文化と留学生の生活文化（400字）	10分

実際には所感作成の時間がとれず、宿題の形で生徒に課した。

②留学生交流授業のねらいと方法

留学生との交流授業は、平成4年「国際・文化科」発足以来、「国際・文化Ⅰ」の授業の一つの方式として取り込んできた。いずれも、生活文化レベルで異文化に直接触れ、視野を拡大させるとともに、内外の文化の異質性と同質性を認識させることをねらいとしてきたものである。以下、その実施記録を示す。

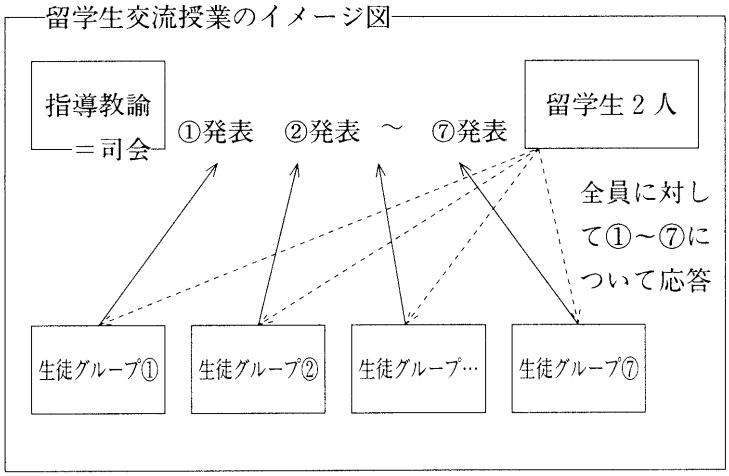
平成4年度：6月13日　ヨーロッパ系留学生との交流（アメリカ人・ドイツ人・イタリア人）
　　12月5日　中国人留学生との交流
平成5年度：11月12日　「教育制度」についての留学生とのディスカッション
平成6年度：6月27日　グループ単位　フリートーク

平成4年度は、クラス単位で留学生と生活文化について語り合うというものであった。しかし、この方法では、交流授業に主体的に参加できない者も現れ、語り会いの焦点もぼやけてしまった。そこで、平成5年度では、「教育制度」に焦点を絞って、グループ単位（7～8人）でディスカッションをするという授業を試みた。そして、平成7年度にはクラスを解体してグループを結成し、留学生とグループ単位で「日本の文化と自国の文化の違い」を語り合う授業にしてみた。

これらの授業の反省点は、いかに生徒を主体的に授業に参加させるかであった。そのために、グループ単位で留学生とディスカッションする方法を導入した。しかし、このためには多数の留学生を招く必要があり、また、教師がそれぞれのディスカッションを指導できない、という問題点もでてきた。

そこで考案したのは、グループ単位で「生活文化比較項目」を「ベストスリー」形式で検討さ

せ、それぞれの項目について、それぞれ代表グループが報告し、それに対して留学生が自国について応答するという方法である。



・実際には生徒のグループは７班である。
・実際には生徒の発表は、ベストスリーを模造紙に図解して発表

そのねらいは、次の４点である。

ｉ）生徒を主体的に交流授業に参加させることができる。
生徒は、準備授業ですべての交流項目についてグループ内検討している。したがって、交流授業における代表グループの発表も、生徒全員が意識化した問題についての発表ということになる。また、留学生の応答も発表グループのみに対するものではなく、生徒全員に対するものになる。これによって生徒を主体的に授業参加させることがねらえる。

ii）指導教諭が、司会者として授業全体を運営できる。これによって、「国際･文化科」のねらいが反映できるような交流授業にすることができる。

iii）フリートークの場合陥りやすい表面的な日本文化紹介にならない。具体的な項目、しかも生徒に関心の深い項目について、準備授業でグループ討論させることによって、生徒に主体的に自分たちの生活文化を考えさせることができる。

iv）発表方法も工夫させることができる。

③生徒の活動と反省

ｉ）発表内容　１年Ａ組の場合

・「附属高校こんな学校ベストスリー」
　１位自由（It is liberety,and is not freedom）
　２位頭が良い（clever）
　３位「変な」先生が多い（a lot of interesting or crazy(？) teachers）

・「金沢ここが好き、ここが嫌いベストスリー」
　「ここが好き」１位食物がおいしい　２位自然が多い　３位史跡・名所が多い
　「ここが嫌い」１位都会ぶっている　２位天気が悪い　３位道が細い

・「結婚相手に求めるものベストスリー」
　「女が男に求めるもの」１位三高がそろっている人　２位運動できる人
　　３位明るくおもしろい人
　「男が女に求めるもの」１位「さしすせそ」ができる人（料理ができる人）
　　２位家庭の礎となってくれる人
　　３位自分より背が低い人

・「私たちにとって好きな食物ベストスリー」

1位じゃがいも料理　2位肉料理　3位和菓子

・「休日はこのように過ごしたいベストスリー」

「男」1位部活　2位海（釣りなど）　3位グランドで遊ぶ

「女」1位カラオケ　2位ボーリング　3位買い物

・「私たちにとって大切な年中行事ベストスリー」

1位誕生日（自分、彼・彼女）　2位クリスマス　3位夏休み

・「留学生の母国はどんな国」

「アメリカ」1位自由の女神像　2位ピストル　3位クリントン大統領

「中国」　1位中国四千年の歴史　2位ラーメン　3位パンダ

ii）所感のおもな内容

① 留学生の日本語力に驚いた。3年あまり英語を学習している自分たちと比べて、学習期間が同程度であるにもかかわらず、留学生の流暢さに驚いた。

② 留学生の母国に対する知識がえられた。その国に対する知らない一面を知ることができた。その国に対するイメージが変わった。

③ 日本と留学生との文化の共通性を認識した。(たとえば、カラオケが中国で大流行しており、留学生もカラオケが好きであること)

④ 同一国内の生活文化の地域差を認識した。(たとえば、ウラジオストク出身のロシア人留学生が、モスクワとウラジオストックの違いを語ったことなど)

iii）授業評価と反省点

iii－1交流授業準備

生徒は楽しみながら、自文化研究できた。しかし、グループ内での討論結果の発表であるので留学生に発表するには客観性に欠けた。グループ内討論ではなくクラスアンケートによる発表にすれば良かったのではないか、と反省している。

iii－2交流授業

所感でも現れているように、留学生の母国に対するイメージが変化したことが最も大きな成果であろう。生徒は、自己の視点からしか外国を意識していない。しかも一つの国を十把一絡げにして意識しており、表面的な認識でしかない。そのことは「留学生の母国はどんな国」の報告内容の中にも現れている。それが、交流授業の中で、直接語り合う中で変化したのは、「国際・文化科」のねらいから考えて大きな意味がある。また、所感の③や④も主権国家の概念をこえた国際感覚の育成のうえでも成果があったといえる。

また、内容が生徒の興味関心と一致するものであり、事前の準備授業での項目検討もあり、生徒が楽しく授業に臨めた。今回の方法を導入した成果もあったといえよう。

しかし、さらに改善する点もいくつかある。

一つは、発表方法の工夫である。確かに留学生は全員日本語が堪能である。したがって、すべて日本語で進行した。少なくとも発表に関しては、世界の共通的言語である英語でさせればよかったと考えている。

二つ目には、語る内容の深さである。項目は日常生活で生徒が考えられるものを選んだ。それを「国際・文化科」の目的に即した形で深めさせることもこの授業のねらいである。確かに、「結婚」の話題から中国の一人っ子政策に踏み込むなど、司会をしている教師の進行で臨機応変の工夫ができた面もあった。その意味で教師の力量も必要である。それとともに、留学生の母国について、あるいはその国と日本の関係について、事前に知識を与えておくべきであったのではないかとも考えている。

(4)フィールドワーク授業

①授業の概要

1．目的

①自己を取り巻くさまざまな環境について、フィールドワークを通して認識するとともに、自己の視野を広げ、それらに対する課題や自己の意見を持つ。

②現地での調査・聞き取りなどフィールドワークの方法を学ぶ。

2．日程

6月12日5限　事前指導

6月19日5・6限　現地学習

3．調査地

調査地①　**自衛隊第14普通科連隊**　担当荒木重治（公民科）

趣旨　「道を隔てた隣に居ながら、何をしているかよく知らない自衛隊。世界が大きく動こうとしている今、自衛隊の生の姿を君の目で。」

事前指導　日本国憲法と自衛隊との関係について（講義）

見学・体験内容

・広報担当官から講義

自衛隊成立と駐屯地の歴史　現在の世界情勢と紛争地域の概略

国連の平和維持活動　自衛隊の各種行事に対する援助活動

自衛隊の災害援助

・質疑

・見学　食堂・売店・風呂　装備品　資料館

調査地②　**加賀友禅伝統産業会館**　担当高橋栄一（地歴科）

趣旨　「県内には数多くのすぐれた伝統産業があり、その代表格とも言えるのが加賀友禅です。豊かな生活を支え、使う人の心を支えてきた伝統文化の匠の技を、友禅を通して、再発見してみませんか。」

事前指導　日本の着物文化と加賀友禅の製作工程について（講義）

見学・体験内容

・事務局長一塚保氏講義

加賀友禅の起こり　加賀友禅の製作工程　産業としての友禅の現況

・館内見学　友禅製作（絵付け作業）実演見学

・友禅染ハンカチ製作実習（希望者のみ）

調査地③　**ＮＴＴ金沢支店**　担当山本吉次（地歴科）

趣旨　「ますます進む高度情報化時代、マルチメディアの世界を体験してみませんか。電話の秘密にも迫れます。」

事前指導　ＮＴＴの職務とマルチメディアの未来について（ビデオ視聴）

見学内容

・マルチメディア講義・体験

マルチメディアの概要　ＴＶ電話会議体験　インターネット体験

・施設見学

オペレーションルーム　ＭＤＦ（配線盤）　デジタル交換機

とう道（電話ケーブル地下トンネル）　113故障対策室

調査地④　**ひまわり教室**　担当分校淑子（家庭科）

趣旨　「就学前の、障害を持った子供たちの施設です。子供たちと実際に遊んだあと、代表の徳田先生のお話を伺います。」

事前指導　「ひまわり教室」を希望した理由について一人一人発表させる。

「ひまわり教室」発刊の雑誌や、障害児についての本などを紹介する。

見学・体験内容

・障害を持つこどもとの触れ合い体験

・障害を持つこどもとの一斉遊び　（大玉乗り　円柱揺らし　など）

・バスに乗っての帰宅指導手伝い

・職員による講義「ひまわり教室の概要」

調査地⑤　**西部クリーンセンター**　担当風間重利（国語科）

趣旨　「家庭ゴミ１トンを処理するのに、２万５千円もの費用がかかっていることを知っていますか。ゴミ処理の最前線で働く方々との対話を通じて、ゴミ問題の多角的本質的理解に迫る。」

事前指導　ゴミ処理現場からみたリサイクル（講義）

見学・体験内容

・工場見学

・前もって提出してあった質問リストに対して広報係より説明

・生徒の質疑応答

調査地⑥　**北陸放送**　担当宮本恵津子

趣旨　「毎度お馴染み６時半からのテレポートシックス。その制作の裏を見る。もしかしたら君の声がラジオから」

事前指導　報道番組「テレポートシックス」視聴。

番組製作についての疑問点について考えさせる。

見学・体験内容

・「日本列島ここが真ん中」放送中のスタジオ見学

・「日本列島ここが真ん中」出演（生徒・引率教官）

・ＭＲＯおよびテレビ報道について　（渡辺報道部長より講義）

・テレビ報道とアナウンスについて　（辰巳アナウンサーより講義）

・質疑

・テレポート６　スタジオ見学

・技術ルーム　報道室見学

②授業のねらいと内容・方法

「国際・文化Ⅰ」においては、当初からフィールドワークの手法を積極的に取り入れようとしてきた。自己を取り巻く自然環境や社会環境を、教室における教師による「教え込み」ではなく、生徒自身の足と耳目で体感させたいというのがねらいであった。そのため、平成4年度は、学校周辺の史蹟「野田山」(前田家墓地・第九師団忠霊塔など)散歩を行い、平成6年度は、環境問題に関するディスカッションの事前体験として、「西部クリーンセンター」(金沢市ゴミ処理場)を見学した。

しかし、いずれも学習効果は少なかったと思われる。むしろ、生徒がグループ研究のための調査として行ったフィールドワークの方がはるかに効果は大きかった。

フィールドワークとは、各人の興味関心に基づく課題に対して、その資料を得るため、現場に足を運び、聞き取り、体験、資料収集を行うことである。したがって、学年単位で学校外で現地学習させても、それはあくまで見学にしかすぎないものになる。興味関心もなく、課題を持たないで参加したものでは、現地で主体的な学習ができるはずがない。グループ研究におけるフィールドワークの学習効果が大きいことはその意味で当然である。

そこで、今回は、目的に「①自己を取り巻くさまざまな環境について、フィールドワークを通して認識するとともに、自己の視野を広げ、それらに対する課題や自己の意見を持つ。」のみならず、「②現地での調査・聞き取りなどフィールドワークの方法を学ぶ。」を加えた。そして、方法や調査地についても次のような工夫を行った。

ⅰ) 興味関心により調査地を選べるように、担当教師の数＝6箇所の調査地を用意する。調査地は「国際・文化Ⅰ」の目的に沿い、かつ生徒の興味関心にもつながる所を選ぶ。

ⅱ) できるだけ少人数で学習できるよう、興味関心に基づいてグループ編成する。1グループは25名を越えないようにする。

ⅲ) 調査地の担当者との連絡を密にしながら学習計画を立て、当日の学習が効果的になるように事前学習を充実させる。

ⅳ) 事後学習として、400字のレポート「フィールドワークによって、見たこと・知ったこと・体験したこと・感じたこと」を作成させる。これによって、調査当日の学習を深め、自己内在化させる。

なお、調査地のうち、「自衛隊」に関しては、従来から憲法問題として取り扱われてきたことについて、事前学習で十分な指導を行い、また、保護者の承諾を得るようにも指導した。

③生徒の活動と反省点

下記に列挙したものは、生徒に課した400字レポート「見たこと・知ったこと・体験したこと・感じたこと」より、同類の記載をまとめたものである。これらから、生徒の学習状況を考察してみたい。なお、文末の数字は、同類の記載をした人数である。

自衛隊　見学者27名

・災害救助活動など色々な仕事をしていることを知った。4
・自衛隊の歴史についてあらためて理解を深めた。3
・資料館見学などにより戦争の恐ろしさ(弾丸の突き抜けたヘルメット)を知った。3
・防衛装備の技術に驚いた。4
・映画やテレビで見る世界が身近にあることに驚いた。5
・先入観と違い、自衛隊のソフトさ、開かれた自衛隊を知った、感じた。16

・自衛隊はもっと固いイメージを払拭すべきだ。1
・自衛隊員の日常生活を知った。2
・マスコミとも違う、授業で学習するのとも違う自衛隊の内部からの視点で話を聞けたのがおもしろかった。3
・自衛隊の活動の制約、社会からの批判を知った。4
・災害時の人命救助など自衛隊の必要性・重要性を感じた。7
・自衛隊を違憲だとしてきた自己の意見が変化した。2
・自衛隊は合憲だと認識した。1
・攻撃力と防御力のいたちごっこを知り兵器の無駄を感じた。1
・自衛隊は災害救助を中心に活動すべきだ。1
・自衛隊について国民がもっと関心をもつ必要がある。2

加賀友禅伝統産業会館　　見学者19名
・加賀友禅の歴史・成り立ちについて知った。8
・加賀友禅の手間や細かさに驚いた。9
・加賀友禅の工程から考えて高い値段を当然と思った。5
・加賀友禅の製作方法の工夫を知った。2
・一枚の加賀友禅がたくさんの人によって作り出されることに驚いた。1
・加賀友禅の美しさを感じた。3
・伝統産業会館へ来た有名人の多さに驚いた。2
・色付けが難しかった。4
・自分で作ったハンカチができてうれしい、楽しい。2
・若い職人がいることに驚いた。1
・日本の伝統を感じながら生きていきたい。1
・伝統産業の加賀友禅に親近感を感じた。2
・伝統の良さを感じ、伝統を伝えていく必要性を感じた。5
・伝統を伝えていく大変さを感じた。1
・自分の住んでいるところの伝統産業を知らないことを恥ずかしく思った。3

ＮＴＴ　見学者23名
・将来の通信技術についてわかった。3
・マルチメディアが身近になったことを感じた。マルチメディアに興味をもてた。5
・マルチメディアの技術に驚いた。6
・日ごろ何気なく使っている電話の技術と施設に驚いた。15
・いくら技術が発展しても人間の手は必要であることを感じた。3
・技術を進歩させる人間のすばらしさを感じた。2
・通信の発達がプライバシーの侵害になるのではないかと思った。2
・幼い頃漫画で夢見ていたテレビ電話を使えて感動した。1
・未知の世界が消えゆくようで虚しかった。1
・通信の発達がますます便利さをもたらせると感じた。7
・世の中が便利になると人間が自分で何もしなくなるのではないかと心配になった。4
・職場で働いている人の忙しさ・大変さを知った。3

・我々のために働いているＮＴＴの人に感謝したい。2
・ＮＴＴの企業のすごさを知った。4

ひまわり教室　　見学者14名
・障害児も健常児と同じであると感じた。10
・障害者の差別はいけないことだ。3
・障害者とは「かわいそうな人」ではないと感じた。1
・無意識下で持っていた障害児に対する優越感がなくなった。1
・障害児を社会のなかに受け入れていけるようにしなければいけない。3
・健常者はもっと障害者と関わっていくべきだ。2
・障害児を応援したい。3
・障害児とどのように遊べば楽しんでもらえるか戸惑った。3
・心と心の通いあいが大切だと感じた。2
・ひまわり教室の重要性を感じた。1
・障害児が普通の小学校にいくべきかどうかについて考えさせられた。2
・職員のすばらしさを感じた。1

西部クリーンセンター　15名
・コンピューター管理・ハイテク装置に驚いた。7
・ゴミ処理の熱が発電や温水プールに使われていることを知った。2
・金銭がかかることを知った。2
・危険に対する配慮がなされていることを知った。2
・集められたゴミを見てゴミ問題の深刻さを感じた。1
・ゴミ処理の仕事の重要性を感じた。3
・「ゴミ」（パックや箱）を買わないようにしようと思った。1
・リサイクルの必要性を感じた。1
・埋立地とそれに対する反対運動について考えさせられた。1
・半透明ゴミ袋の効果を知った。4
・ゴミに対する市民の意識改革がゴミ問題解決の解決策だ。3
・自己のゴミに対する関心の低さを反省した。1
・ゴミ問題は重大であるから、テレビやラジオでもっと訴えるべきである。1

北陸放送　27名
・番組制作の過程・工夫・苦労を知った。16
・番組制作が秒刻みであることを知った。5
・番組制作の裏話（カンニングなど）がおもしろかった。7
・番組制作のためにスタッフの協力が必要であることを知った。3
・スタジオの技術・施設に驚いた。7
・北陸放送の歴史を知った。3
・ラジオ番組に出演する貴重な体験ができた。12
・スタッフの忙しさ・努力を知った、「プロ意識」を感じた。5
・番組制作のスタッフがいきいきとしていることを感じた。3

・時間の大切さを感じた。1
・将来放送関係の仕事につきたいと思うようになった。2
・将来生きがいのある仕事をしたいと思った。1
・報道の在り方にもっと関心を持ちたい。1
・ニュースを身近に感じた。1

レポートを見る限り、当初の目的は概ね達成されていたのではないかと言える。生徒はそれぞれに新鮮な感じ方をしている。実際に自らの目で見、現場の方々の話を直接聞き、そして自ら体験することによって、調査対象に対して、文献や授業で学習していたのと違った感覚を得ていた。

調査対象によらず、レポートを分類すると概ね次のようになる。

①新しい知識を得た。初めて知った事実に驚いた。

②従来と違う見方や考え方になった。

③自己が今後どうすべきかを考えた。

④対象に対する関心が深まった。対象に対してさらに深く考えるべきことを見つけた。

⑤現場で働く人の苦労や努力を知った。

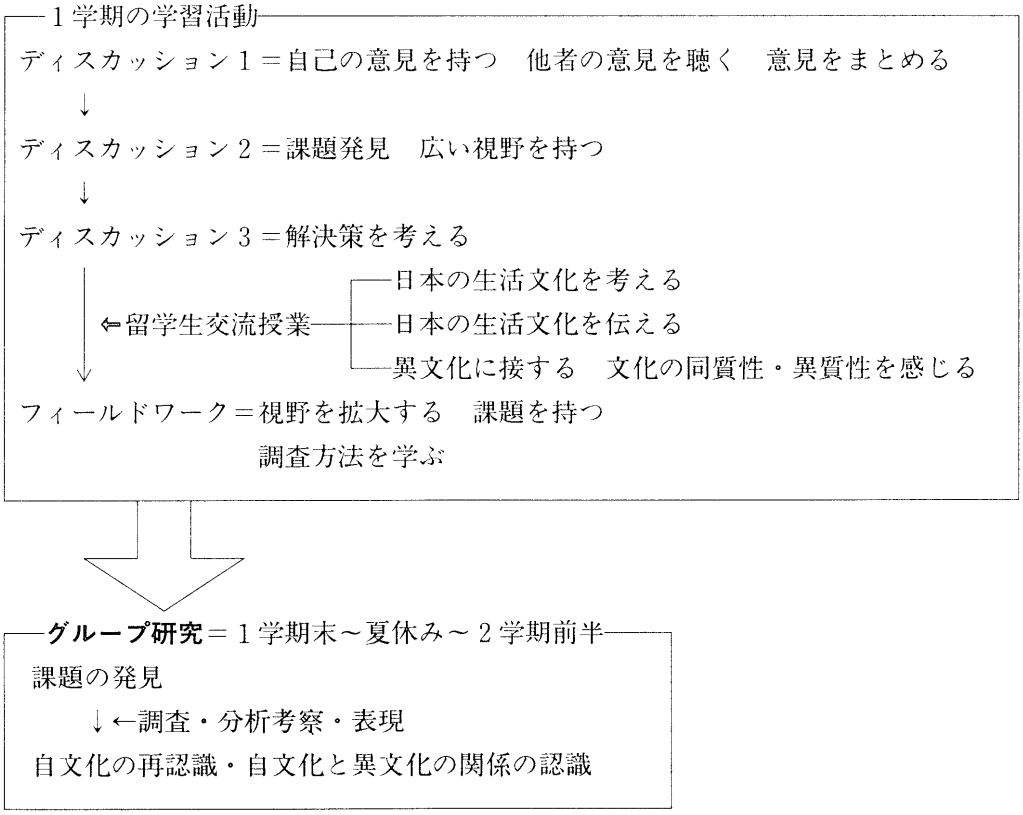
①～④はおおよそ事前にねらったところである。生徒たちは単に新しい知識を得ただけではなかった。先入観で持っていたのとは異なる新しい見方や考え方する生徒もいた。明らかに広い視野を持たせることには成果があった。さらに③や④に到った生徒も少なくない。とくに、「ひまわり教室」に参加した生徒のなかには、レポートで「健常児と障害児は同じ小学校の同じ教室で学ぶべきかどうか」という課題を自ら持ち、それについて真剣に考えていた者もいた。

⑤は予想外の成果であった。生徒は日ごろ社会で活躍している人のなまの姿を見ることがほとんどない。生徒にとっては、それら働く人々の姿を見て新鮮な感動を得たのであろう。生徒が職業人としての生き方を考えるうえで、この経験は大切であったといえる。

しかし、反省すべき点もなくはない。生徒は、現場の方々の説明に影響されやすいということである。たとえば、自衛隊について説明していただいた方は非常にソフトな方であった。また、現在自衛隊は「開かれた自衛隊」をめざしている。生徒はその説明された自衛官のイメージで自衛隊をとらえている。また、ＮＴＴの職員はもちろんＮＴＴの技術開発が人類の未来を明るくすると信じて取り組んでいる。しかし物事には必ずメリットとデメリットの両面がある。マルチメディアはメリットばかりではなくデメリットもあるはずである。説明していただく方々が自らの立場で話をなさることは当然である。しかし、説明者の立場を認識していなければ、対象に対する見方を誤ってしまう。その点を、もう少し意識して事前に指導しておく必要があったのではないか。客観的な見方をもって、あるいは批判的な見方をもって現場を体験できるような事前学習の在り方が今後の課題であろう。

5．おわりに

1学期の学習活動と、1学期末から2学期にかけての学習活動を図式化すると次のよう



になる。

この図で示されるように、1学期の学習活動は、2学期以降の学習活動の基礎となるものである。1学期末から夏休みを経て2学期の授業は、グループ研究という手法をとって、自ら課題を発見し、それについて調査・分析考察をし、そして研究内容をわかりやすく表現をするという学習活動となる。主体的学習の中で、自文化を再認識させ、自文化と異文化の関係、たとえば同質性・異質性、影響関係などを認識させていこうというのがそのねらいである。

さらに、2学期後半から3学期は、実際に現地を訪れる「中国」にターゲットを絞る。その学習の中で、自文化と異文化の関係についての認識を深めさせ、加えてコミュニケーション能力も育成していきたい。そして、1年末の中国現地学習に臨み、それまでに机上で学習してきたことを体験によってさらに深めさせ、外から見た自文化を再認識させようと考えている。

現時点で、「国際・文化Ⅰ」の1学期の学習効果を「科目目標」の観点から測ることは困難である。近い時期にそれを推測できるとしたら、中国への現地学習にどのような態度で臨むか、そして中国で何を体感して帰ってくるか、であろう。

4年目を迎えた「国際・文化Ⅰ」であるが、確かに改善点や課題も多くある。しかし、ほとんどの生徒が、この授業に楽しくしかも主体的に取り組んでいたといえる。しかも、生徒の学習観もかなり変わった。情意的な観点からいえば、成果は小さくないと考えている。

1学期末以降の授業展開、科目全体の評価などについては、次号で報告したい。

(1)『研究開発の手引き』　（文部省初等中等教育局高等学校課）

(2)以下、「国際・文化科」の目標・内容・方法、および成果と反省点については、『文部省研究開発学校研究開発実施報告書（最終年次）「新教科：国際・文化科の導入を考慮した教育課程の検討」』（金沢大学教育学部附属高等学校　1995年3月）の中で詳しく報告した。

(3)グローバル教育の考え方に関しては、魚住忠久『グローバル教育の理論と展開』（黎明書房 1987年)、『グローバル教育　地球人・地球市民を育てる』（黎明書房　1995年）を参考にした。

(4)この「国際人としての資質」は金沢大学村田昭治氏よりの「国際理解教育の在り方」に関するご示唆による。